コーティンと過ごした1年半

―南部ベトナム人の魅力

荒神衣美

筆者は二〇一〇年四月末に、夫と一歳半（当時）になる娘と三人でベトナム・ホーチミン市に赴任して以来、お手伝いさんを雇用している。彼女の名前はティンさんという（以下、こちらでの呼び方にあわせて、コーティンと記述する）。住み込みではないとはいえ、毎日四時間近くを我が家で過ごす彼女との関係は、日が経つにつれて親密になり、いまや筆者の海外派遣生活を語る上で欠かすことのできない存在になっている。この一年半、コーティンは筆者一家のお手伝いさんである以上に、ホーチミン生活の先生であり、ベトナム語の先生であり、また、ホーチミン滞在中「妻が働き、夫が家を支える」という日本では一般的とはいえない家族のあり方を選択した筆者一家の一番の理解者でもあった。以下では、コーティンを通じて見た南部ベトナム人の魅力を、エピソードを交えて描いてみたい。一般に、南部ベトナム人は（北部ベトナム人に比して）大らかで裏がなく、新しいものに対してより柔軟だといわれる。その点、コーティンは典型的な南部ベトナム人といえる。

（一）果てしない大らかさ

南部ベトナム人の最大の魅力は、なんといっても細かいことを気にしない大らかさだと思う。大らかさに関するエピソードは、いくら挙げてもきりがない。まず、よく言われることだが、とにかく時間を気にしない。コーティンは、我が家に来始めた最初の数日こそ時間通りにやってきたが、その後は、実に適当な出退勤シフトを独自に採用している。遅刻一時間は「問題なし」、遅刻二時間で「あ、ちょっと遅れちゃった」などとつぶやいたが早いか、大きな声で歌など歌いながら掃除を始めたりするのだから、なんとものんびりしたものである。一方で、娘が病気にでもなれば、二時間でも三時間でも、時間を構わず家事・看病の手伝いをしてくれたりもする。遅刻常習犯も捨てたものではない。

病気に関しても、細かい原因を追及するようなことはしない。筆者は赴任して半年後くらいに「何らかの」アレルギーに罹ったのだが、結局その原因がなんだったのかわからず仕舞いである。というのも、コーティンをはじめとして、語学学校の先生、研究所の同僚、また現地病院の医者までもが「気候変化の」アレルギーという表現をするのだ。日本人的に考えれば、気候変化の結果、生じた何か（例えば花粉）がアレルギーの原因だろうと思うのだが、いくら聞き回っても「気候変化が原因」という回答しか得られなかった。その後も、風邪を引いても、おなかを壊しても、ちょっと目まいがする時も、「それは気候変化のせいね！」と、体調不良は何でも「気候変化」で片付けられてしまう。要は、細かい原因を追及する暇があったら、ベトナム人と同じように昼寝でもして、しっかり休息を取ればいいのだ。いまや我が家でも「気候変化」は魔法の言葉と位置づけられ、体調不良のたびに常用されている。

（二）ストレートな表現、裏のない性格

南部ベトナム人の第二の魅力は、素直さだと思う。多少の個人差はあるだろうが、たいていの人は様々な事柄に対してあまり含みを持った言い方をしない。たとえば、コーティンはよく筆者家族にプレゼントを買ってきてくれるのだが、その際、値札を外すということはしない。値札がついていないものであっても口頭で値段を伝えてくる。最初は抵抗があったが、慣れてしまえば、逆にこちらから贈り物をする際の相場がわかるので、大変ありがたい話である。

同様の経験は、農村調査の際にもあった。調査に同行してくれた南部ベトナム人研究者が、謝礼を払うべき相手の目の前でお金を包んだり、事前に用意してあった封筒を渡す際に中の金額をわざわざ告げたりするのだ。北部の人と調査に行く際には、陰でこっそり相場金額を包むのが大概であり、相場がわからず悩むということもしょっちゅうだったので、南部ならではのこの作法は筆者の目にはかなり新鮮に映った。

子供に対する愛情表現も超直球だ。ベトナム人は一般に子供好きといわれるが、コーティンもご多分にもれず非常に子供好きである。筆者に対しては低いダミ声で話をするコーティンだが、娘を前にすると人が変ったように猫なで声で話しだす。娘が多少嫌がっていてもお構いなしに娘を抱きあげ、頬や手、しまいには足にまでブチュブチュっとしてしまう。日本でそのような経験をしたことのなかった娘は、最初こそ驚いてワンワン泣き叫んでいたが、一週間もすればすっかり慣れた（否、対処法を知った）様子だった。こうした子供への過剰なまでの愛情表現はコーティンに限ったことではない。スーパー、病院、銀行など、行く先々で、見ず知らずの従業員がコーティンと同じような行動に出るから驚きだ。

（三）こだわりのなかにも柔軟性

概して大らかで素直な南部ベトナム人ではあるが、独自の経験則に従った理論を曲げない頑固さ

こうじん　えみ／アジア経済研究所　在ホーチミン海外派遣員

専門はベトナム地域研究、農業農村経済。
農産物の生産流通消費および農家経済の変容に関心を持って研究している。

も持ち合わせている。コーティンに家事をお願いするなかで一番困った交渉事が化学調味料の使用についてである。東南アジア全般に化学調味料が多量に使われているという話を聞くが、ベトナムも例外ではない。スーパーに行けば「味の素」「クノール」などの大袋がでんと陳列されている。コーティンが最初に我が家にやってきたとき、そうした粉はないのかと聞かれたので、「子供が小さいので化学調味料は使わない。」と言ったのだが、自信満々に「クノールは大丈夫。」と返されてしまった。コーティン理論によると、味の素は化学調味料だが、クノールはそうでないということであった。

一方、驚いたことに、そうした頑なな自説は、ふとした瞬間に実に簡単に覆されてしまうこともわかった。二カ月かかって漸く、コーティンにクノールは化学調味料だと理解してもらったのだが、なんと、納得した次の瞬間から「化学調味料を食べ過ぎると、私、頭が痛くなるのよ。」などと平然と言ってのけるのである。まるで、以前からいかにもそうであったかのような具合である。現在では、「子供の発育を考えたら化学調味料を使い過ぎるのはよくない。」というのがコーティンの自説となり、近隣のお手伝いさんにもその自説を披露している。ベトナム企業に関するある論文で「本業にこだわらず時流に合わせて臨機応変に事業転換を行うといった柔軟性がベトナム企業の強みのひとつではなかろうか。」という指摘があったが、個人レベルで見ても、そうした指摘が当てはまるように思う。

以上のような気質は、ともすれば「適当で気遣いがなく、移り気」とも受け取れる。一緒に仕事をするうえでは、あまり喜ばしい気質ではないかもしれない。しかし、ホーチミンに生活するなかで、コーティンに典型的に見られる「大らか、正直、柔軟」な気質は、ここの気候や生活条件のもとで快適に暮らすには欠かせないものなのだろうと思うようになった。

農作物を豊富に育む恵まれた自然環境の一方で、経済的には決して豊かとはいえない生活。コーティンは、故郷のメコンデルタ・ソクチャン省から、一八歳のときに母親とともにホーチミンに出てきて以降、炉端で料理を売ったり、果物を売ったり、ときには宝くじを売ったりして生計を立ててきた。幼い頃のソクチャン省での生活も楽なものではなく、コーティンの兄妹九人のうち、五人はカンボジアに移り住んでしまったそうだ（メコンデルタは多民族社会であることが知られているが、なかでもソクチャン省はクメール族が多い地域である。コーティンの祖父母もクメール人と中国人である）。コーティンを見ていると、その明るさ・柔軟さは強さに裏付けられているのだということをしばしば感じる。コーティン自身、「幼い頃の貧しく厳しかった田舎での生活を思えば、何だって耐えられるわ。」と笑いながら話すことがある。この一年半、家には二人の息子が居るにもかかわらず、旦那は仕事もせずに遊び歩き、コーティンに金をせがみに来るばかりという始末で、旦那が暴れた次の日には、我が家で仕事をしながらオイオイと泣いたりすることもあった。それでも翌日には朗らかなコーティンに戻っていた。農村研究者などと言いつつ田んぼのヒルさえ見たことのない筆者に、掃除の手を「完全に」休め、ケラケラ笑いながらヒルにかまれた際の状況を事細かに教示してくれるコーティン。海外派遣生活を通じて、こんな愉快で素敵な南部ベトナム人女性に出会えたことは、筆者にとって一生の宝だと思っている。